

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 27 日現在

機関番号：34317

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008 ～ 2011

課題番号：20520062

研究課題名（和文）：「縁起性」の視点からする関東・親鸞伝説の立体的理解の試みに関する研究

研究課題名（英文）：Multi-faceted research on kanto-region legends concerning Shinran, from the viewpoint of *Engisei*

研究代表者

堤 邦彦 (TSUTSUMI KUNIHICO)

京都精華大学・人文学部・教授

研究者番号：60163846

研究成果の概要（和文）：真宗の祖・親鸞の伝記伝承を、歴史資料にとどまることなく研究協力者各自の視点により考察し、伝承を立体的に捉え直す試みを行なった。すなわち、「関東絵伝を中心とした伝記の絵画化」(1)、「川越名号」(2)、「植髪尊像」(4)では個別の縁起生成と拡散の問題に明らかにした。また近世期の周辺事情に関して、江戸戯作への素材提供(3)を明らかにするとともに、立山信仰との関わり(5)、四国地方の「うつし」霊場の問題(6)をとりあげ、真宗史以外の領域にみられる親鸞伝説の当代的な受容を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Researchers participating in this collaborative project have reexamined biographies and legends about the life of Shinran, founder of the Jodo Shinshu sect of Buddhism, from diverse perspectives that are not limited to an analysis of the texts as historical documents. More specifically, three of the scholars discuss processes whereby biographies of Shinran such as the *Kanto eden* came to be represented in painting (1), the *Kawagoe myoden* (2) and *Uegami no sonzo* (4), thereby shedding light on the question of the origins and spread of these legends.

Concerning the background to the transmission of such texts in the early modern era, three other scholars have demonstrated that the legends provided materials that came to be used in late Edo *gesaku* literature (3), as well as the relationship of the legends to ascetic mountain practices in Tateyama, Toyama Prefecture (5) and to the practice of *Utushi reijo* in the Shikoku region (6). These studies offer new interpretations of the reception of legends and biographies of Shinran by scholars working outside the field of Jodo-Shinshu Buddhist history.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|----------|-----------|---------|-----------|
| 平成 20 年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 平成 21 年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 平成 22 年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 平成 23 年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,100,000 | 930,000 | 4,030,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：宗教史

1. 研究開始当初の背景

(1)二十四輩伝承と関東絵伝

近世中後期の真宗僧侶、一般門徒のあいだに宗

祖親鸞にまつわる二十四輩旧跡巡拝の宗風が広まりを見せたことは、すでに真宗史研究の分野に多

くの先行研究がそなわる。門徒の参拝資料、旧跡に関する出版物の全容をめぐっては、渡辺信和「二十四輩巡拝とその案内書」(『巡礼記研究』4、2007、9)や同朋学園仏教文化研究所編『【共同研究】真宗初期遺跡寺院資料の研究』(1986、3)よりその全容をうかがうことができる。

また19世紀以降の出版界においては、二十四輩を含む真宗宗教名所を絵入刊本の形式で紹介した『二十四輩巡拝図会』(1803刊)、『親鸞聖人御一代記図会』(1860刊)のような名所図会があいついで公刊され、居ながらにして旧跡参詣の旅を疑似体験できる書物を世に出すことになった。この方面の研究については塩谷菊美『真宗寺院由緒書と親鸞伝』(2004、法蔵館)などに委曲がつくされていると言える。

一方、関東二十四輩の寺院において編纂され、在地の門徒や参詣者に対して唱導された宗祖絵伝に目を転ずると必ずしも本願寺教団のひろめた公式な二十四輩伝承に拘泥しない。肉筆彩色形式の多種多様な史伝絵画の世界が展開したことに気付かされる。それらの内容は二十四輩旧蹟の枠組みを持ちながらも、各寺院ごとに異なる在地伝承的な説話を取り込む点で、中央教団の編纂した公的な親鸞伝との間に差違を生じている。また、『二十四輩順拝図会』等の刊本に依拠したと思われる説話や図様も少なくないが、典拠関係の詳細については、いまだ明らかにされていない。いわば関東絵伝ともいべきこれらの掛幅図の研究は、ほとんど未開拓の分野であるといっても過言ではない。

(2)二十四輩順拝における川越ノ名号伝承の成立と展開

本研究は、プロジェクトの全体の目的である「親鸞の伝説は、他の如何なる要素と交渉を持っているのであろうか。」という問いに答えるために、親鸞の二十四輩順拝研究のなかでもあまり注目されていなかった上越地方を調査地に選んだ。上越地方は、親鸞聖人が滞在した地域であり、現在でも多くの場所に親鸞伝説が残されており、そうした伝承が在地風土や他宗派の信仰とどのように絡み合いながら生成されていったのかを読み取る試みから始められた。

(3)十返舎一九『金草鞋』十六編「二十四輩御旧跡巡拝」について

近世中期以降、『親鸞聖人御旧跡并二十四輩記』(享保十六・1727年刊、竹内寿庵)に代表される二十四輩巡拝のための実用的な道中案内記の刊行

は、その巡拝が僧侶だけではなく、一般門徒にも拡大していたことを物語る。その出版物の多くが上方発のなかで、江戸の人々を対象として道中案内記的な書物が刊行されていたことを見過ごしてはならない。そのひとつが、江戸の戯作者十返舎一九が著した合巻『金草鞋』十六編「二十四輩御旧跡巡拝」(文政六年・1823年刊)である。

しかしながら、いままで二十四輩巡拝の研究において本編が取りあげられることはなかった。それが、娯楽読み物であるという出版の特徴が原因でもあろうが、本研究ではそうしたもう一つの二十四輩に光をあてたい。

(4)江戸中期における祖師像の縁起とその受容について

親鸞が得度した天台宗青蓮院門跡には、植髮堂と呼ばれる御堂があり、ここに親鸞聖人得度時に剃髪した髪を植えられた親鸞の木像が安置されている。この阿弥陀堂及び植髮尊像は当初、二十四輩巡拝の聖地ではなかったが、享和三年(一八〇三)刊行の『二十四輩巡拝図会』山城之部などにも記されるなど、親鸞の旧跡巡礼の地として真宗門徒に親しみ深いものとなっていった。

しかし植髮堂及び植髮尊像の研究としては、平成一三年刊行『略縁起・資料と研究3〔神田家記録・寺院略縁起〕』(勉誠出版)に略縁起と解題があるのみである

(5)地域的信仰と結びつく二十四輩聖跡巡拝

了貞編『二十四輩巡拝図会』には、親鸞および真宗の聖地以外の大小様々な「場」や非真宗的なものが多数みられることは周知のことであるなか、「越中立山」もまたその「場」に含まれる霊場である。立山信仰史研究の立場からは、盛行に向かう「二十四輩」の展開において、越中立山が取り込まれた理由について、単に近世真宗教団整備における親鸞のカリスマ化の形成議論としての時代的流行や民俗的信仰の取込みの一つとして指摘されているだけで、具体的な検証はなされていない。

(6)親鸞聖人二十四輩巡礼の地方移植

二十四輩巡礼については関東旧蹟寺院巡拝についての事例がよく知られている。だが、その「うつし」が関東から遠く離れた地域に存在することは、地元の一部の郷土史家をのぞけば、八十八カ所や三十三カ所の「うつし」霊場に比較して、研究者にはほとんど研究者に知られていなかった。むしろその信仰や歴史についての知見の蓄積も皆

無と言ってもよい状態である。

2. 研究の目的

(1)諸寺の宝物、略縁起、関東絵伝の関係はもとより巡拝ルートの変遷や明治版の木版絵伝との関わりなどの実態究明は、近世以降の親鸞伝説を立体的に捉え直そうとするとき、避けてとおれない種々の問題を内包していると考えてよい。とりわけ公的史伝と在地伝承の混交が近世から近代の間に表面化するプロセスを個別の絵伝の成立事情に比定するところに調査の主たる目的がある。

(2)二十四輩順拝における「川越の名号」伝承といえ、親鸞が河川の対岸の紙面に向かって筆を虚空に動かすと、そこに名号の文字が浮かび上がるという神秘的な霊験譚を思い浮かべる。ところが、その伝承地である上越高田地方には、もうひとつ別系統の「川越の名号」伝承が存在しており、その伝承には親鸞による筆の霊験や名号が現れる奇譚などの神秘的な要素はほとんど含まれていない。このふたつの伝承の差異に着目し、〈親鸞旧跡の歴史背景〉、〈親鸞絵伝・略縁起の制作〉、〈弘法の筆伝承との関わり〉の三点の視座から、「川越の名号」の親鸞伝承が成立した背景を探ることを目的とする。

(3)『金草鞋』とは、十返舎一九が文化十(1813)年から天保四(1833)年にかけて刊行した合巻で、全二十五編にもおよぶ長編である。娯楽読み物である合巻『金草鞋』十六編「二十四輩御旧跡巡拝」が、一般に浸透していった二十四輩巡拝のひとつの形であると捉え、真宗門徒以外の人々にとって二十四輩巡拝がどのように受け入れられていたのかについて考える。

(4)今回の科研調査の一環で閲覧した個人蔵の略縁起(上田氏蔵)に、神田家略縁起とは別の、植髪尊像の略縁起を発見した。二点の略縁起を基に、江戸期に植髪尊像が親鸞ゆかりの尊像としてどのような展開を見せていたのかを考察する。

(5)了貞編『二十四輩巡拝図絵』に挙がる「立山」に関する内容を取り上げ、立山がこれに取り込まれた背景を探りつつ、一二の研究課題について考察を加える。

(6)「うつし」巡礼の信仰の歴史や実態を理解することで、浄土真宗信仰の庶民化について明らかにする。

3. 研究の方法

(1)①関東絵伝の所蔵整理と諸本のデータ調査お

よび所収説話の出版と諸本間の異同調査。②関東絵伝の周辺に位置する縁起書、宝物、掛幅図との類縁性を明らかにし、絵伝成立の背景に果たした在地信仰圏のありかを浮き彫りにする。

(2)本プロジェクトにおいて、二度に分けて上越高田地方の寺院調査を行い、親鸞聖人絵伝や略縁起資料等の調査・翻刻をおこなった。

(3)『金草鞋』各編の成立については、小林寛子氏(『古典研究』21号、1994年4月、ノートルダム清心女子大学古典叢書刊行会)や丹和浩氏(『方言修行 金草鞋』別巻、1999年10月、大空社)が、典拠となった文献の存在を指摘される。本十六編についての典拠関係は明らかにされていないが、本編も他編と同様の傾向があると推測できる。そこで、まずは本編の寺社に関する記載事項を中心に抽出したうえで、典拠関係を含めた成立背景についてみていく

(4)二点の略縁起の比較検討

(5)A.『二十四輩巡拝図絵』における「立山」の記述的特徴分析、B.二十四輩巡礼者の立山登拝の実態に関する史料の検証。

(6)A.四国地域について二十四輩「うつし」巡礼地の全体的把握を行う。B.できるかぎり管理者に聞き取り調査を実施して信仰の実態を把握する。C.二十四輩信仰の正統(本山主導)と異端(民衆主導)を浮かび上がらせて民衆にとっての真宗信仰のあり方を明らかにする。

4. 研究成果

(1)双幅または四幅形式の巡拝型の関東絵伝として、未見を含めて以下が明らかになった。

(A)茨城県坂東市沼田・西念寺(二十四輩の第7番)蔵『御絵伝関東の巻』(箱書きによる)、双幅、絵本着色、121、2×43.1、一幅六段、全二十景 幕末から明治。(B)茨城県水戸市酒門町・善重寺(第12番)、『開基絵伝』双幅、紙本着色、116、1×65、6、一幅六段 全二十四景、明治期の成立か。(C)茨城県水戸市飯富町・真仏寺(非二十四輩の旧跡寺院)蔵『親鸞関東絵伝』、四幅、紙本着色、128.0×58.0、一幅七段、全四十景カ。(D)茨城県鉾田市鳥栖・無料寿寺蔵『関東御絵伝』、四幅、紙本着色、159.0×57.0、未見(『真宗初期遺跡寺院資料の研究』による)。(E)大分県中津市耶馬溪町大字大野・浄正寺。四幅、(法量未計測)、一幅六段、全四六景カ(第2幅の上部一段目破損、現存部分は四四景)。

[所収説話の特色] (A)～(E)の所収説話の出拠は、そのほとんどに近世中・後期に刊行された『二十四拝巡拝図会』『親鸞聖人御一代記図会』や高田派の『高田開山親鸞聖人正統伝』(1717刊)と同材であり、「板敷山の法難」「川越の名号」「枕石寺の由来」「花見岡の大蛇済度」といったオーソドックスな縁起を図様化している。ただし、一部に教団公認の御伝絵や刊本類に不載の在地伝承の加筆を認めうる。たとえば(A)西念寺の第8景に描かれた赤童子の由来(鹿島神の化身)は、刊本系の名所図会はもとより、17世紀末の巡拝記類(『君聚抄』)、高田派の『正統伝』などにも記述がなく、わずかに茨城県境町一ノ谷の妙案寺(第六番)の読み縁起の中に寺蔵の「赤童子御影」をめぐる伝承を知るのみである。こうした特色は関東絵伝在地性を如実に表すとみてよからう。

[図様の出拠] 図様の類縁性に関して一言すると(A)西念寺の構図には、万延元年(1860)刊の『親鸞聖人御一代記図会』の挿絵と類似する描写がみえ(花見岡、与八郎)の亡妻など)絵伝の成立年代を幕末～明治期と推測することができる。宗祖六百年忌にあわせて出版された『御一代記図会』の広範な流布をふまえて西念寺本が成立したとするならば、そこに量産型の絵入り刊本メディアから地方寺院固有の絵解き図への展開という興味深い事象を想起しうるだろう。

[諸本の展開] (A)西念寺本が関東周辺の旧蹟にまつわる伝承を取りあげているのに対して、(B)の善重寺本、(C)の真仏寺、(E)の浄正寺本は「関東絵伝」を標榜しながら、いずれも前半部分に越後、信濃の巡拝ルートに関する宗祖旧蹟(三度栗、日の丸名号など)を描いている。このことは、近世後期から明治初年にかけて二十四輩巡拝のネットワークが伝承圏を広域化し、絵伝の旧蹟選択に地域的な拡大が生じた天を示唆するのではないか。(E)の絵伝は、現在大分の浄正寺の所蔵になる一本であるが、大正、昭和期に関東絵伝を関西・九州方面に運び絵解きを行ったとの聞き取り(西念寺現住)から類推するに、何らかの事情により九州地方に伝播したものと考えられる。関東由来の親鸞伝説が、幕末・明治期の宗祖伝の一般・通俗化を受けて諸地方の門との間を経巡ったであろうことは想像にかたくない。

ところで、(B)の善重寺本には、親鸞の高弟・性信房の靈験を強調する説話が付け加えられてい

る。(龍返し of 宝剣、生野天神の故事)。宗祖伝の形式によりつつ、あえて二十四輩各寺の開山僧と寺宝の因縁にこだわる姿勢は、個別寺院の伝承に移行していった関東絵伝の特質を物語る。

[関東絵伝の周辺] 先にとりあげた関東絵伝とは別にそれらの派生型として、各寺院の開山、宝物を主体とする掛幅画が生成していたこともまた、今回の調査で明らかとなった親鸞伝説の立体化を示す事柄といえるだろう。例えば、茨城県水海道市の報恩寺(二十四輩の第一番)および東京台東区の報恩寺(同)はともに性信房の開いた二十四輩の筆頭格寺院であるが、開山に帰依した飯沼天神が鯉魚規式を行っている。台東区報恩寺には、この因縁を含めた性信の一代記に焦点をあてた四幅の絵伝(筋書きから明治期の成立)が伝わり、宗祖伝から二十四輩高層伝への質的変容を顕然とさせるにいたっている。

二十四輩寺院の所蔵絵伝には、これにとどまらず自坊の開山僧を中軸にすえて関東への真宗の拡張を物語る語り口が目につくすなわち唯信房開創の西光寺(第24番、茨城県常陸太田市)の場合は、鬼女を化した妬婦の済度を描く双幅の絵伝(「鬼人成仏証拠之角縁起」と鬼角などの宝者を所蔵する。さらには二十四輩寺院に入らない茨城県・坂東市阿弥陀寺のように、親鸞聖人の悪龍済度における双幅絵伝(各五段、紙本着色)と証拠の経、龍髭を寺宝とする事例さえ見られ、二十四輩伝承の外郭に在地の宗教説話が増殖し、絵伝をとまなう布法場に展開するさまを示す。

こうした動向もまた、親鸞伝説の立体化をあらわす幕末～近代以降の新たな特色と言えるだろう。今回の調査をふまえて、高僧伝の民間浸透をめぐる断片事象がどのような組み合わせをもち、寺院伝承に収束するのかといった生成プロセスの一端を明らかにすることができた。

(2) (ア) 新潟県上越市高田町 浄興寺 【川越の名号】縦一四・四cm×横六・七cm 非常に小さな六字名号。【川越の名号縁起】縦二一cm×横九七cm。

【日の丸名号縁起】縦三六cm×横八二cm。(イ) 新潟県上越市高田町 長楽寺 (本誓寺の境内にある寺院) 【親鸞聖人絵伝】四幅 明治十七年 定番の絵相。【蓮如上人絵伝】四幅 近年購入したもの 絹に印刷。上越市高田町の浄興寺・本誓寺は『二十四輩順拝図会』には双方が並んで描かれている。近世期において浄興寺、本誓寺は上越市

高田を代表する巨刹であり、しかも双方に「川越名号」の伝承が伝わっている。(ウ)新潟県上越市柿崎町 浄福寺。【川越の名号】【川越略縁起(版本)】縦二五cm×横一六cm。【川越略縁起(肉筆)】縦二八cm。(エ)新潟県上越市柿崎 浄善寺【川越略縁起】縦二八cm×横八四cm【川越略縁起絵伝(浄善寺)】二つの寺院 上越市柿崎町の浄福寺・浄善寺は川越の名号の在地の伝承がのこっている地域。(3)本編での二十四輩巡拝は、まず江戸の築地門跡を出発点とし、麻布善福寺など御府内にある旧跡から、武蔵・下総・常陸・下野・陸奥・出羽・越後・越中・越前・京と巡り、その後、東海道を中心に、近江・美濃・尾張・三河・遠州・甲州・伊豆・相模・上州を経て江戸に戻ってくる。本文中、寺社から寺社への行程と距離、宿場の情報や名物・名産なども紹介され、合巻ではあっても実用的な道中案内記の側面がみてとれる。とりわけ着目すべきは、巡拝のルート上にある二十四輩以外の寺社が大小を問わず紹介されていることであろう。なかには、真宗以外の寺社も記載されているようである。これは、本編が真宗門徒以外の読者層も想定して作られていたからであり、真宗信仰の枠から自由であった十返舎一九の合巻ゆえに可能となったのであろう。

さて、本文での、寺社の紹介には寺号のあとに「二十四輩のうち」とのみの記載もあれば、開基・伝説などを詳細に述べる場合もあり、各寺社の情報量は一定していない。また、三村の妙安寺を「めうもん寺」、磯辺の勝願寺の開基「善性房」を「しんしやう房」とするなど誤記が多い。ほかにも、さまざまなところで誤りが目立つ。さらに、こうした誤植箇所について興味深いのは、本編が明治期に大坂の書肆より再版された際、修正が加えられていないことである。信者からみれば、やはり本編は信仰から逸脱した戯作であったのかもしれない。

本編には二十四輩巡拝の道中記類や図会に記載のない情報も多く、特徴的な解説文で記されている。今後は二十四輩巡拝が娯楽読み物へとかたちを変える意義と、それがもたらす二十四輩巡拝への影響を考察していきたい。

(4)【神田家略縁起】 題「略縁起」、一紙一枚、寸法：縦三四・五糎×横四七・七糎、本文二三行。

【上田氏蔵略縁起】 題「略縁起」、末尾に「粟田御堂」、一紙一枚、寸法：縦三〇・七糎×横四三・

六糎、本文一九行。どちらの略縁起にも刊年はない。上田氏蔵略縁起は、文政七年(一八二五)『祖師聖人御旧跡記』という朱印帳と共に保存されていた為、この巡拝の際に手に入れた略縁起である可能性が高い。また、注目すべきは、神田家略縁起で親鸞聖人の母が像を作らせたとなっているのに対し上田氏蔵略縁起では、母は早くに亡くなっており、像をつくらせたのは聖人を引き取った伯父範綱の妻となっている。この変化の背景として興味深いのは、神田家略縁起にある書き込みである。この略縁起上部には後人による次のような考証が書き込まれている。「祖師聖人御母吉光女ハ治承四年ノ五月廿一日逝去則聖人八才の御時何ぞ御得度九才の御時御存命に有しや妄説不可信也此植髪の御影は八才以前の御事と知るべし」。通俗的には親鸞聖人八才の折に母は逝去したとされており、九才の得度の際に存命してはおかしい、というのである。すなわち神田家略縁起の書き込みは、ただありがたい聖典として略縁起を受け取るのではなく、書かれている言説に対して考証を行っていた事を示している。そして、上田氏略縁起での変更は、そうした視点を持った門徒が少なくなかった事を示している。

(5)『二十四輩巡拝図絵』の詞書は5つの内容に分割できる。①立山の景観と立地。②開山縁起。③阿弥陀如来尊貌の山容。④鎖場の鎖、三条小鍛冶宗近の作。⑤山中の「立山地獄」である。このなかで、②～④は注意を払われるべき内容である。まず、②では、開山を「大宝三年教興上人」とするが、これは南北朝期の『神道集』「越中国立山権現事」に見出されるのみである。多くの文献はすべて「大宝元年慈興上人」であり、『図絵』と『神道集』系統の伝承の関係が注目される。④について「三條小鍛冶宗近」が立山の言説空間に登場するのは『和漢三才図絵』が早い。この伝承は、芦峯寺側のテキストにはあらわれず、山を実質管理した岩峯寺方のテキストに継承されている。

[二十四輩巡礼者と立山] 安政五年以降加賀藩外からの立山禪定登拝者(芦峯寺大仙坊泊)を追記する『立山禪定人止宿覚帳』に、「滋賀縣若狭國遠敷郡阿納浦壱番地濱本金八三十一才/同三方郡小川浦四十五番地安原林蔵三十五歳/諸国巡拝/明治十五年七月十四日」などとみえ(同様の史料が他にも数点ある)、立山は二十四輩巡礼者を確かに受け入れていた事実を認めることができる。近代

の記録とはいえ、真宗関係の聖地以外で二十四輩巡礼者の受け入れを示した史料として貴重である。(6)四国四県について調査を行った結果、徳島県に5カ所、香川県に26カ所、愛媛県に1カ所の計32カ所に二十四輩の「うつし巡礼地」を発見した。高知県には現段階では見つかっていない。多くは舟形の石に阿弥陀仏と光背を浮き彫りにした形式で、阿弥陀仏の両側に参詣の番号と遺跡名(多くは寺院名)が書かれている。現在の安置形式は、寺院境内などに集積されている場合と巡礼が可能なおよびある地域に散らばって置かれている場合がある。それぞれの石仏の管理は必ずしも真宗門徒ではない地元の人で行われることが多く、石仏が二十四輩であるとの認識が希薄になり、「お地藏さん」としてあらたな伝承が付与されていることも多い。例えば、高松市の「庵礼二十四輩」の23番無量寿寺(本来は3番)の場合、親鸞の産死婦女幽霊濟度の伝承がレリーフ化されている。地元では「幽霊墓」と呼ばれ、もとそこは、鬱蒼とした所で妖怪の出没するところだったという。また墓所でもあった。場所を選んで親鸞の幽霊濟度の伝承のある無量寿寺が置かれた可能性を考慮しておいてもよいだろう。また産女に関わるからだろうか、お産の神様との認識もあった。二十四輩は地元に移されてそこに定着することで、二十四輩信仰を超えてあらたな庶民信仰の対象となっていた様子を垣間見せてくれる事例である。

[研究成果のまとめ] 今回の調査を通して得られた最大の研究成果は、歴史上あるいは宗内研究史のうえで従来あまり顧みられてこなかった「民衆の中の親鸞像」を絵画、伝承、地域社会の信仰民俗、名所図会、江戸戯作といった事柄との対比によって総合的に捉え得た点であろう。一見、別の宗派の宗教伝承と考えられがちな「立山信仰」との連関に着目しつつ、北陸の親鸞伝承の派生型を推測する視点などは一例といえるだろう。あるいは十返舎一九の合巻『金草鞋』に描かれた二十四輩巡拝をてがかりに当代庶民の共有したであろう祖師像を復元するアプローチは、聖典記録とは異なる親鸞伝説のありようを知るには欠かせない。また「川越名号」「植髮尊像」などの伝承の拡散と変容を、略縁起、巡拝記録といった近世資料の読み直しにより裏付ける視点は、今後の高僧伝説研究において、近世～近代の事例の処理方法として大いに参考となるに違いない。近現代に至る高僧

伝承の変容という点では、四国地方にみる「うつし」霊場の問題や明治期成立の関東絵伝の伝播を指摘しえたことも、今回の有意義な成果であった。なお、研究協力者・菊地政和の収集した近代版「親鸞さま」紙芝居の系譜も特筆すべきものであるが、図像容量の関係もあり、詳細を略せざるを得なかったのが残念である。

歴史上の事実認定や資料分析の重要性は勿論であるが、他方、文献のかたちをとらない広汎な「資料」を駆使した親鸞伝説の立体化をめざし、その大半を可視化できたところに研究成果の眼目を見出しておきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

①堤 邦彦、二十四輩巡拝と関東絵伝、文藝論叢、査読あり、72号、大谷大学、2009、109-126

②堤 邦彦、生活の中の異界、別冊太陽、査読あり、170号、平凡社、2010、138-145

[学会発表](計0件)

[図書](計1件)

堤 邦彦・徳田和夫編『遊楽と信仰の文化学』森話社、2010、448

[産業財産権]

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

[その他]

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

堤 邦彦 (KUNIHICO TSUTSUMI)

研究者番号：60163846

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし

(4) 研究協力者 鈴木堅弘(京都精華大学・共通教育センター)、義田孝裕(ノートルダム女子大学)、末松憲子(京都精華大学・初年次教育部門)、加藤基樹(立山博物館学芸員)、橋本章彦(京都精華大学非常勤講師)、菊地政和(花園大学非常勤講師)